ひと意見

伝統野菜でSDGsに貢献

江戸東京・伝統野菜研究会代表
大竹 道茂

江戸東京野菜の出前授業（目標4）や市民を対象にした講座では、初めにSDGs（持続可能な開発目標）から入る。小学3年生に目標マークを見せると「知ってる！」と声と手が上がる。

2023年7月14日のニュースで、国連のグテレス事務総長が「地球温暖化の時代は終わりです。これからは地球沸騰の時代が到来しました」と発言。その日までの猛暑に市民は納得すると同時に、改めてSDGs17の目標について考える機会になった。

伝統野菜の江戸東京野菜は、17の目標のうち10に関わっている。中でも目標13の「気候変動に具体的な対策を」は、フードマイレージが分かりやすく、15年にSDGsが国連総会で採択された以前の01年に農林水産省が導入した。地産地消の言葉は定着し、地域の住民は近くにある都市農業を支援し地産地消に貢献（目標11）して、住み続けたい街になった。季節の新鮮な野菜を味わい、心と体の健康を促進（目標3）していた。

生産者は「つくる責任、つかう責任」（目標12）のもとで、消費者と共に健康と安全を考えて江戸東京野菜を栽培しているが、この暑さである。江戸東京野菜の中でも代表的な「練馬大根」は、江戸時代から8月25日過ぎに種をまいていたが、温暖化の中では9月10日ごろにまいていた。それが猛暑で耕土の中まで熱くなり根をやられた秋野菜はいろいろある。

「早稲田ミョウガ」を例にとると、10年に1893（明治26）年から早稲田にお住まいのお宅で発見した。江戸時代から早稲田大学が創立された明治中期ごろまで、露地栽培されていた。それが江戸から明治の時代にはありえなかった猛暑によって、限度を超えたのか露地栽培の早稲田ミョウガは分けつが進まなかった上に、病気なども発症した。農家にとっては生産意欲や働きがい（目標8）にも関わっている。

わが国では、高齢化の進行によって、採種業を営む個人は減少し、誰でも採種ができる固定種とは異なり、一代雑種（F_1）の採種は世界に依頼していて、生産地として種袋には世界各国の国名が記されている。これ以外に食料の安定確保（目標2）や、海山や陸の豊かさを守る（目標14、15）などはもちろんで、生産者は消費者とのパートナーシップで（目標17）、地球規模のより良い社会実現を目指している。